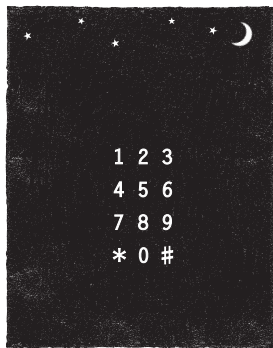


第2話
午前四時の迷子



時計が一時になった。

ここから、〈東京03相談室〉はラッシュ・アワーになる。

冬木可奈子^{ふゆきかなこ}は、ちょうど手が空いたので机の上を整えなおし、ついでに息も整えて窓の外を見た。都内某所、最寄駅から十二分のところにある五階建てビルの四階に彼女はいる。そこが彼女の仕事場だった。オペレーター・ルームの二十五番デスク――。

午後十時から午前七時まで、休憩をはさんで、およそ八時間にわたって電話を受けつづける。ここでは朝昼夜の三部に担当が分かれ、夜の部を受けもっている彼女は交代時に昼の担当者からいくつか報告を受ける。

「おはようございます――」

その夜は、後藤新一^{ごとうしんいち}という彼女よりひとまわり若い後輩から引き継ぐことになった。

「今日はひとつ、厄介なことがあります」

後藤はそう云いながらも、どこかにこやかだった。そういうところが、(憎らしい)と思うときもあれば、(頼もしい)と思うときもある。

「ボイス・バンク用の電話で、ひとつだけ古いタイプのものがありますよね」

「ああ——」と可奈子は曖昧に相槌を打った。ボイス・バンクは主に昼の担当者が扱っているので、夜組にはあまり馴染みがない。見た目は——たしかに旧式ではあるけれど——普通の電話となんら変わりなく、ボイス・バンクという名前も内々でそう呼んでいるに過ぎなかった。簡単に云えば、「留守電専用機」で、オペレーターの手がふさがっている、自動的にボイス・バンクにつながる、そこへ相談内容を吹き込んでもらうようになってる。相談者によっては、稀に電話番号を申告する者もあり、そういう場合は、相談内容を聞いた上でオペレーターからかけなおすこともあった。とはいえ、〈相談室〉にかかってくる電話の大半は身元を明かさなない匿名者ばかりで、単純に話

し相手になってほしくてかけてくるケースが多かった。

だから、ボイス・バンクに登録されたメッセージを聴いても、無言で切ってしまうか、せいぜい「また、かけなおします」とひとこと録音されているのがほとんどである。

「あれを、お払い箱にしよう、ということになりまして」

「おはらいばこ？」

後藤が似つかわしくもない古びた言葉をつかったのを可奈子は聞き逃がさなかった。これは間違いなく職業病のあらわれだ。ちよつとした言葉の端々から、電話の向こうにいる顔の見えない相談者の人となりに見当をつけてゆく――。

「ええ」と後藤は何食わぬ顔で説明をつづけた。

「ぼくにもよく判りわかりませんが――これが後藤の口ぐせだった――「なんとかいうあたらしいシステムを導入したらしくて、留守電はもう要らなくなつたそうです」

「そう」と応こたえながら可奈子はかすかに首をかし

げた。「でも、それがどうして厄介なの?」

「引き取りにくるんですよ、業者さんが。午前四時に」

「どうしてそんな時間に——」

「向こうの都合でそうしてほしいそうです。うちが二十四時間営業だと聞いて、それならいつでもいいですよ。よく判りませんが、ああいうデータが蓄積されたものの処分って結構手がかかるそうで、それで、業者さんも強気みたいです」

「ふうん」

「いや、可奈子さん、ふうんじゃなくてですね、その引き渡しをしてほしいんですよ」

「あ、そういうこと」

そんなことなんでもないわ、と可奈子はむしろ興味すら覚えていた。これもまた職業病かもしれない。そんな時間に、なぜ廃棄処分になった電話を引き取りにくるのか、担当者の個人的な都合でそうなっているのか、それとも、その業者も二十四時間営業で、「不要なものがあったら、いつで

も引き取りに参ります」をモットーにしているのか――。

夜の終わりのそんな時間に？

興味深い、きわめて興味深い――とつぶやきながら、後藤から渡された「Aクラス案件」のリストに目をおした。その日、昼組が受けたすべての電話の中から、「継続的に話を聞くべき」と判断されたものをAクラスとして選り分けてある。

当然、夜組もまたAクラスと認定されたものを取りまとめて、朝組のオペレーターに伝えている。

リストには簡単なメモが添えられているが、「深刻な相談」よりも、「もつと話を聞いてほしい様子」と記されたものが圧倒的に多かった。

〈相談室〉と名乗ってはいるものの、電話をかけてくる人たちは必ずしも悩みや相談事を抱えているわけではない。そのほとんどが、「誰かと話したくて」「自分の話を聞いてほしいんです」と訴える人たちだった。彼ら彼女たちは、そのこと自体をひとつの悩みととらえているようだが、夜組の可奈子にしてみれば、夜にひとりで部屋にいて

誰かと話したくなるのは「あたりまえのこと」と思っていた。

というのも、もともと彼女もまたそのひとりであり、彼女に限らず、この〈相談室〉で働いている者たちは、あらかじめかたかつての相談者だった。

「わかったわ。午前四時にね」

「可奈子さんを訪ねてきますので、四時前のきりのいいところで切りあげてください。今日はそれで終了です」

「え？」と可奈子は後藤の顔を見なおした。滑舌はいいのに、ときおり意味不明なことを云うときがある。

「終了ってどういうこと？」

「立ち合ってほしいそうです」

「立ち合うって、何に？」

「ですから、電話の廃棄です。よく判りませんけど、そういう習わしだそうで——」

「ちよっと待って、それってなに？ 電話機を処分するのを見届けろってこと？」

「そうみたいですね。あの留守電には相当な数の

個人情報バンクされていますから」

「だって」可奈子は声が大きくなりそうなのを抑え、身ぶりだけは大きいまま、「そんなの、ハンマーか何かで叩き割ればいい話じゃない」

「まあ、そうかもしれないですけど」後藤はチーフから渡されたメモを確認していた。「こんなことが書いてあります。廃棄は厳粛なもので、云つてみれば葬儀のようなもの。完全な粉碎および焼却が完了したことを確認してください——」

「それって、持田チーフもちだがそう云ってるわけ？」
「いや、どうでしょう。向こうが——処分してくれる業者さんがそう云ってきたんじゃないですかね」

後藤は「午前四時」と大きく走り書きされたそのメモを可奈子に渡し、「よく判りませんが」と首を振った。「とにかく、業者さんに同行するようにと云ってました」

「ふうん」

可奈子はメモを手にし、「午前四時」の四文字よりずっと小さく書かれている「粉碎および焼

却」の方に目を奪われていた。

*

どういう理由からそうしたことが起きるのか判らないが、オペレーター同士が云うところの、「言葉が重なる」という現象がたびたび起きる。

今夜もそれが起きた。

午後十一時から午前二時までの三時間のあいだに、可奈子は十二人の相談者から電話を受けた。そのうち、あきらかに年齢も境遇も違う三人の男女が、そろって「最後のひとつが見つからなくて」と言葉を重ねたのだ。もちろん、そこには三者三様の筋道がある――。

「わたし、人生の次の段階へ進みたいんですけど、最後のひと押しがほしくて。でも、きっかけになつてくれる最後のひとつが見つからないんです」「ファイヤーマン・キャンデーのおまけに付いてくる変身ボールっていうのを集めてるんです。その最後のひとつがどうしても見つからなくて」

「ネックレスのひもが切れちゃったの。もう最悪。ビーズ玉が飛び散って——二十八個あったはずなんだけど、最後のひとつが、いくら探しても見つからない」

「見つからない」と「探している」は相談者が使うフレーズの定番だった。可奈子が引っかけたのは、「最後のひとつ」で、その言葉のあとに「見つからない」が付け足されると、記憶の底から小さな気泡がいくつも立ちのぼってくる。

彼が——弟が最初に探していたのは何だったろう？

（たぶん、いちばん古い記憶は八幡様はちまんさまのお祭りのときだ）

可奈子は午前二時の東つかの間の休憩時間まに、窓の外の外の殺風景きわまりない街路樹を眺めながら缶コーヒーを飲んでいた。

（わたしが小学三年生のときだから、弟は一年生だったことになる）

母に命じられるまま、弟とふたりで近所の神社へ出かけた。子供たちだけで行ったのはそれが初

めてで、「陽が暮れる前に帰ってきなさい」と母にきつく云われていた。

しかし、弟はそういうときじつに自由で、父や母に云われたことをまったく聞いていないところがあつた。その分、可奈子の心配は倍増したが、そんな弟が（憎らしくもあるし）（頼もしくもある）と、そのときはそんな言葉は思いつかなかつたものの、心持ちとしてはそんな感じだつた。

もうひとつ云うと、弟は可奈子が知っているどんな男の子たちよりずっと個性的だつた。他の子たちと同じことをするのをさりげなく拒否し、いかにも背を向けるのではなく、自然と皆から離れてひとりで行動するところがあつた。

それゆえ、彼はたびたび迷子になつた。

冬木蓮れんという彼の名前は、いったいどれくらい遊園地や百貨店でアナウンスされただろう。

「迷子のお知らせです——」

（そういえば、最近聞かなくなつたな、あれ）

しかし、人の多いお祭りの境内はハナから迷子になつてください、と云っているようなもので、

だから可奈子はレンの体に自分の体をびったり添わせて手をつないでいた。

にもかかわらず、だった。ふと気づくとレンは音もなく可奈子の隣からいなくなり、「え？」と声をあげたときには四方八方どこにも姿がなかった。

「ああ」と可奈子は絶望的な声をあげ、足早になって屋台をひとつひとつ見てまわった。

いまでもそうだが、可奈子はちょっとしたこと、顔つきがいわゆる困り顔になる。場合によっては何も困るようなことなどないのに、

「あれ、可奈子さんどうしたの」と優しい声をかけられる。

しかし、そのときは正真正銘の困り顔で走りまわった。

いくつもの匂いにおと色が次々いれかわってゆく。

焼きそばのソースの匂い、あみずあめ餡のオレンジ色、メロンソーダの鮮やかなエメラルド色と甘い匂い、とうもろこしの焼けるこうばい香り、ス

パー・ヒーローを象かたどった銀色のお面、赤いビロ
ードの幕を張った射的屋の埃ほこりくさい匂い。

どこにもいなかった。

「レン、どこにいるの」と声をあげたそのときだ。
そこにそんな屋台があっただろうかと目を疑った
のだが、可奈子の視線の先に、学校にある地球儀
くらいの大きさの透明なガラス球がいくつも浮い
ていた。

本当に宙に浮いているように見えた――。

ざっと十個は浮いている。一見、糸につながれ
ているようには見えない。しかも、ガラス球の中
には何かしら閉じ込められていて、ミニカーであ
るとか、ハーモニカであるとか、板チョコとか小
さな花束や腕時計といったものまで。それらもや
はり糸で吊つるつられていてるわけではなく、どこから
どう見てもガラス球の中で浮いていた。

あたかも、その小さな屋台のまわりだけ重力が
存在しないかのように、色とりどりの玩具おもちゃやお菓
子が気ままに自由に浮遊していた。そして、それ
らのひとつひとつを何かにとりつかれたようにじ

つと見つめてゐる弟の後ろ姿があつた。

「レンっ」

可奈子は弟の名を大きな声で呼んだ。自分でもびっくりするくらい大きな声だったが、そのくらの声を出さないと、弟はこのままどこかへ行つてしまふのではないか——もしかして、あの宙に浮いてゐるガラス球のひとつに閉じ込められ、この世ではないどこかへ連れ去られてしまふのではないか——何かの本で読んだそんなおかしな空想に支配されてゐた。

可奈子はもういちど声をあげて弟に近づいた。

そのときである。屋台の端に立っていた黒帽子の男が口もとに手をあてがい、いきなり、ぶあつい唇のあいだから、みるみる透明なガラス球を吐き出した。

「あ」と可奈子もまた金縛りにあつたようにその様に見とれ、弟とふたり、ほとんど恍惚こうこつとした面持ちで透明な球体が膨らんでゆくのを見守つてゐた。

「ねえ、昔そういうものをお祭りの屋台で売っていたと思うんだけど、ママは知ってる？」

大人になった可奈子は、いつだったか行きつけのバーのママにカウンターごしに訊いたことがある。彼——見るからに色っぽい女なのだが、じつは男性である——は正確な年齢を秘密にしていたが、おそらく可奈子と同世代で、同じ時代の東京の隅の方で、同じ空気を吸って育った同士だった。

「ああ、あれはね——」

ママは可奈子の質問にいつでも適確に答えてくれた。

「あれってたしか駄菓子屋でも売ってたよね。アタシたちの方では風船玉って呼んでたかな。ていうか、あれって基本、セメダインじゃないの？少なくともガラスではないわよね。風船ガムみたいにさ、セメダイン臭いかたまりをストローの先にあてがって膨らませるのよ」

可奈子はときおり自分の記憶が夢だったんじゃないかと思うことがあるが、そういうときはママに訊いて真偽を確かめてきた。ママは可奈子が深

夜に相談をもちかける唯一の存在で、同時に東京でただひとりの気のおけない友人だった。

「おお」とあのときレンは小学一年生にしてはマセた声色で屋台の男が膨らませた透明な球を見上げていた。

「わたしも隣で見上げながら、しっかりレンの手を握りしめてた。それから、ずっとそんな感じだったのに——」

ママが自分の困り顔を優しい目で見ているのが判った。

「なのに、いつのまにか手を離しちゃった」

可奈子はママから視線を逸^そらしてうつむく。

「しょうがないわよ」ママが可奈子の手に自分の大きな手を重ねてきた。「大人になったら、ずっと手をつないでいるわけにいかないんだから」

「うん。そうだけど。でもね——」

「もう、何年になるんだっけ」

「十二年かな」

「早いわね」

「短いような長いような」

レンはある日、ふたりが同居していたアパートから姿を消してしまったのだ。何の予告もなしに——と云いたいところだったが、

（あれが予告だったのかな）

可奈子には思い出されることがある。

「いまのところ、事件性はないと思いますけど」

それが失踪しっそう当時の警察の結論だった。

「じゃあ、弟は——」

「出て行かれたのではないですかね？　あるいは、帰り道が判らなくなったとか」

もうすでに子供ではなかった。じきにレンは二十四歳になろうとしていて、だから、刑事は冗談で云ったのである。

（迷子になったのだ）

可奈子はそう思って腑ふに落ちた。

「最後のひとつが見つからなくてさ——」

レンはあの朝、そう云っていた。

そのころ可奈子は知人のつてで就職した貿易会社で働き、仕事もせずに本ばかり読んでいるレンを、（自分が養うのだ）と心に決めていた。

「何が？」——仕事に出かけるところだったので、可奈子は気持ち半分で弟と言葉を交わしていた。

「何が見つからないって？」

「ジグソーパズルの最後のひとかけら」

「パズル？」

そんなものに弟が興じていることに姉は気づいていなかった。もしかすると、そのときレンはもう少し詳しくパズルについて説明したかもしれない。が、いつもの電車に間に合わなくなりそうだったので、可奈子は「見つかるといいね」とそれだけ云いのこして、あわただしくアパートを出た。それが弟と交わした最後の会話だった。

「ねえ、アンタ」

ママの声が、ぼんやりとした可奈子の耳にいきなり注ぎ込まれた。

「アンタ、いいかげん、レン君のことは忘れなさい」

可奈子は何と答えていいか判らず、ただ黙って聞いていた。

「あのね、アンタの気持ちはよく判ってるの。人

が何かを探す思いって伝染するからね。それこそパズルじゃないけど、ほとんどゲームみたいなものよ」

「そうねえ」——可奈子はそのときと同じように半分うわついた思いで生返事になった。

（弟が見つけれなかったパズルの最後のひとかけらを、自分もまた見つけられずにここまで来た

——）
その小さなかけらは、どう考えても他愛たわいのないものだろう。

レンが完成をめざしていたパズルの絵がどんなものであったか可奈子は知らない。もしかすると、彼はひとつの比喩ひゆとして「パズル」というアイテムを持ち出してきたかもしれない。

つまるところ、それが本当のことであろうが想像上の架空のものであろうが、パズルのピースをひとつひとつつなげていった先には、完成すべき一枚の絵があるはず。

けれども、そのほとんど完成間近の絵柄に対し、レンがどこかになくしてしまった「最後のひと

「つ」は、それひとつだけでは、どんな絵なのかまったく手がかりがつかめない。

「ちなみに、レン君が云ってた未完成のパズルって、あのあと、見つかったわけ？」

「ううん、まだ見つかってない」

「てことは、最後のひとつだけじゃなくて、パズルそのものが見つかってないわけね」

(そのとおり)

だから、もし何かのはずみで、ひよいと「最後のひとつ」がカーペットの隙間すきまから出てきても、それが一体なんのかけらなのか、どんな完成図の一片なのか、可奈子には判らない。

ある日、掃除の最中にととうとう見つけるのだ

。

右手に掃除機のノズルを持ち、左手の指先に「かけら」をつまんで途方に暮れている——そんな自分の姿が、ついに完成された一枚の絵のように思い浮かんだ。

*

「お待たせしました」

その声に可奈子が反射的に時計を見ると、午前四時を三分ほど過ぎたところだった。

電話を引き取りにきたのは思いがけず若い女性で、思いがけないというより、意表について喪服に身を包んでまっすぐに立っていた。

「ええと——」

可奈子は彼女の喪服を観察していた。どうやら、アイロンをかけてからずいぶん時間が経っているようだ。

「やっぱり、そういうのを着た方がよかったですかね」

可奈子の質問に、喪服の彼女は自分の服に向けられた視線を読みとっていた。「いや、これは」と急いで首を振り、可奈子の様子から（このひとは面倒かも）と素早く判断した。

「なにか問題があったら、こちらに連絡してください」

「さい」

マニュアルどおりの対応をしながら「モリイズミです」と名刺を差し出し、「苗字が森で名前が泉じゃないですよ」——これまで幾度となく説明してきたことを、相手に訊かれる前にあらかじめ云っておいた。

「そういう苗字なんです」

「なるほど、モリイズミさん、なんですね」

可奈子はお返しに自分の名刺を渡したが、モリイズミは名刺に一瞥もくれず、すぐに喪服の胸ポケットに、ぐいぐいとねじ込んだ。

「じゃあ、処分しておきますから——」

電話機のはいった段ボール箱を手慣れた様子で小脇に抱え、どこからともなく伝票を取り出すなり、「サインをここに」と可奈子に示した。

云われるまま可奈子がボールペンを走らせると、モリイズミはさっと伝票を取り上げ、強引にポケットに押し込んで、「では」と可奈子に背を向けた。

「あ、待ってください、わたしも一緒に行きます」

から」

「はい?」

モリイズミはかすかに顔をしかめながらも、ものめずらしげな目で可奈子を眺めた。

「一緒に?」

「いえ、あの——」

可奈子はいまひとつ歯切れが悪かった。まさか喪服が必要だとは思いつかなかったからである。

「処分に立ち合うよう云われているんで——」

モリイズミはすでにエレベーターに向かって歩き出し、背中の方からなにやら訳の判らないことを云い募ってくる可奈子の声を適当に聞き流していた。

(これが最後のひとつだ) (早いところ終わらせて一刻も早くアパートに帰ろう) (明日は仕事が休みだ。帰ったら、シャワーを浴びて、コンビニで買っておいた弁当を食べ、ビールをちよつとだけ飲んで、テレビをつけっぱなしにして眠ろう)

エレベーターをおり、ビルの玄関を出たところで、

「ここで、もう結構です」

うしろにいた可奈子を振り返って、きっぱりとそう云った。

「いえいえ」

可奈子は大げさに手を振り、「あ、この車ですね」などと明るい声を出したかと思うと、いち早くモリイズミのワゴン車の助手席に体をすべり込ませた。

「ちよっと——こわいこわい」

モリイズミが迷惑そうにしているのも顧みず、

「大丈夫です。今日はそのつもりですし、仕事もこれで終わりですから」

「いや、そういうことじゃなくて——」

「いえ、いいんです」

可奈子はそのとき、メモに書いてあったことは業者の要望ではなく、やはり持田チーフの指示であったのだと、さすがに理解しつつあった。あのひとは、自分の思惑を誰かの考えであるかのようにすり替えるところがある——。

「長いあいだ、一緒に働いてきた電話なんです」

そんなこと思ってもみなかったのに、自ずと口がそう動いた。

「というか、そんなわたしの感傷なんかよりですね、その中にバンクされている声や情報が、完全に——ええとちよっと待ってください、メモに書いてあるんです——うん、そうでした、完全に粉碎されて焼却されないと、うちとしても責任を問われてしまいますから」

モリイズミは可奈子の云っていることが、半分以上理解できなかった。しかしこの調子ではどうにも簡単におさまりそうになかったので、「じゃあ、気が済むまで——」と、とりあえずそう答えて車をスタートさせた。

「あの」と可奈子は横目でモリイズミの喪服をいまいちど確認した。後部座席には電話のはいつた段ボール箱があり、それもひとつやふたつではなく、ゆうに一ダースは積んである。

「電話を葬るときは、やはりその格好をすることになっていくんでしょうか」

「いいえ」モリイズミは少し怒ったような口調に

なった。「これは昼の仕事用で、今日は時間がなくて着替える間がなかったんです」

「昼の仕事？」

車は首都高の下を走る国道にはいり、フロントガラスを通して、オレンジ色の街灯が一定の間隔をおいて二人の顔を照らしていた。

「わたし、実家が葬儀屋なんですよ。たまに呼び出されて手伝わされるんです。ひとり娘だし、親も歳をとってきたから、頼まれたらことわれなくて」

「そういうことでしたか——」

「冬木さんは、あそこで電話のお仕事ですか」

「あれ？ どうしてわたしの名前を知ってるんです？」

「どうしてって、名刺もサインもいただきましたし——」

（あ、ちゃんと見てたんだ）

可奈子は少し驚き、まじまじとモリイズミの横顔を見て大いに納得した。第一印象では若く見えただが、よく見ると案外そうでもない。

「〈東京03相談室〉、四階オペレーター・ルームの二十五番デスク。担当、冬木可奈子さん——ですよね」

モリイズミは事もなげに暗誦あんしゅうした。そうか、と可奈子は感心する。ひとまわり下の後藤君よりはるかに経験を積んでいた。本物のプロフェッショナルだった。

「で、どこにあるんですか。電話の——なんだろう、やっぱり墓場と云えばいいんでしょうか」

可奈子の問いに、モリイズミは思わず苦笑した。「そんなものないですよ」

「でも、粉碎して——」

「そんなこと、わたしたちはしませんから」

「じゃあ、どうやって——」

「中のデータをすっきり抜き取って、リサイクル業者にまわすだけです。粉碎も焼却もしません」

「ハンマーで叩き割るとかは——」

「それもないです」

「そうなんですか——」

可奈子は突然、笑い出しそうになった。どうし

てか判らない。ほとんど笑いかけ、しかしそれから急に真顔に戻って、「あれ？」と姿勢を正した。「じゃあ、わたしたち、これからどこへ行くんです?。」

*

車をおりてから、可奈子は（失敗したか）とすぐに後悔したが、あのまま無意味なドライブをづけて、モリイズミさんに迷惑をかけるわけにいかなかった。

「すぐそこが自宅なんで——」
嘘をついて、見知らぬ交差点でおろしてもらった。

「アンタもさあ——ママに云われたことを急に思い出す。

「レン君とよく似てるわよ。血は争えないわね。思いつきで行動して、自由で、偏屈で、いっつも何かを探してる。そのうち、アンタもどこかへいなくなっちゃうんじゃない?。」

夜の終わりのひとけのない交差点に立ち、青になつたり赤になつたりする信号をその目に映していた。

「どこなの、ここは」

車が一台として通らなかつた。空気からすつかり音が抜かれ、誰かがいきなりポリウムをゼロにしてしまったような無音の中に可奈子は置かれていた。

「どうしよう」

迷子になつてしまった、と上着のポケットに手を差し入れると、もらったばかりのモリイズミの名刺が指先に当たり、それとは別に、もう一枚名刺がポケットに入れたままになつていたので、
(なんだっけ?) と取り出した。

夜のタクシー〈ブラックバード〉。

「どこへでも参ります」とあつた。